

相愛大学研究助成報告

相愛大学研究助成 重点研究 B

わが国の学校教育における芸術体験事業としてのオーケストラプログラムの今日的課題の考察

音楽学部音楽マネジメント学科 砂田和道

1. 研究の背景と目的

近年、英米の傾向から創造性ある市民育成を事業趣旨に据えた文科省・文化庁事業が多くなった。そこで事業プログラムに、創造性を高める理論、手法が存在するのか関心を抱いた。オーケストラの「子どもへの芸術体験事業」を調査し、それらが音楽教科や人格形成といった人材教育に、あるいは文化政策における創造的的市民育成にどのように寄与しているか検討することにした。そして、わが国の学校教育に有益なオーケストラの教育プログラムを考察し、教育・文化政策の共益となるオーケストラ活動の在り方を考えたい。

2. 研究の概要

A) 調査方法

平成 23 年度から 2 年間で、ロンドン、バーミンガム、ニューヨーク、兵庫、愛媛にてフィールドワークを行った。調査対象は小学生向けの学校公演であり、公演においては「曲目」「曲間のトーク内容」「曲間のトークにおける児童の反応」を時系列に記録を記した。

B) 対象団体

- ・ロンドン交響楽団
- ・バーミンガム市交響楽団
- ・ニューヨーク・フィルハーモニック
- ・日本のオーケストラ 1 (文化庁事業)
- ・日本のオーケストラ 2 (文化庁事業)

C) 分析結果

	英米	日本
内容	テーマ、ストーリー性ある展開	演奏と説明
曲目	多様	画一的
共演	・平易な内容 →歌唱・手拍子	・校歌合唱 ・代表者が技術の必要な体験 →指揮・打楽器
話し	・児童への問いかけ →児童の主体的活動 →意見表明・挙手	・一方的な説明 →児童は受動的 →曲目・楽器紹介
組織	教育部門あり	教育部門なし

3. 研究の成果

本研究により英米と日本のプログラム実態の差異が明らかになった。そして創造的的市民育成という英米の観点をわが国に取り入れるなら、次のような課題が見出される。そして課題解決によりオーケストラは、今日的社会ニーズに応えることを可能であると考えられる。今後は、実証研究に移り、創造的的市民育成に関する効果測定を学校、行政、芸術団体が協力して行なう必要があるだろう。

- ①オーケストラに専門性ある教育部門の設置
- ②芸術文化教育プラットフォーム・・連携の仕組み
- ③オーケストラの今日的課題に応じる事業展開

特別演奏会助成

「人々はなぜ笛の音に惹かれるのか」

音楽学部教授 竹林秀憲

平成 24 年度、及び平成 25 年度相愛大学特別演奏会助成を受けて開催した演奏会 2 件について報告致します。

(1) 木管五重奏+ピアノの魅力 (平成 24 年度相愛大学特別演奏会助成)

《日時》平成 25 年 1 月 17 日 (木) 19:00 開演
《会場》ムラマツリサイタルホール新大阪

(約 200 席)

《入場料》一般：3,000 円 学生：1,500 円

《演奏者》

フルート：竹林秀憲 (相愛大学教授)

オーボエ：岡山理絵 (京都市立芸大卒、マンハイム音大、ヴェルツブルク音大留学、フリーランス)

クラリネット：ブルックス・トーン (ミシガン大卒、大阪フィルハーモニー交響楽団首席、相愛大学非常勤講師)

ファゴット：大角多佳子 (京都市立芸大卒、相愛オケ演奏要員)

ホルン：村上哲 (京都市立芸大卒、大阪フィルハーモニー交響楽団首席、相愛大学非常勤講師)

ピアノ：塩見亮 (東京芸大卒、マンハイム音大卒、相愛大学非常勤講師)

《演奏曲目》

1. フランツ・ダンツィ：木管五重奏曲 op.56
2. ルードヴィッヒ・トゥイーレ：六重奏曲
3. ポール・タファネル：五重奏曲
4. フランシス・プーランク：六重奏曲

(アンコール) ポール・マッカートニー (ビー

トルズ)：64 歳になったとき

《入場者》

165 名 (学生：77 名 一般：60 名 招待者：28 名)

《研究成果》

18 世紀～20 世紀の代表的な木管五重奏曲 (ピアノを加えた六重奏も含む) を取り上げました。この編成の曲は、コンチェルティーノ (ソロ) とリビエーノ (合奏) として立場が刻々と入れ替わり、演奏者は元より聴衆にとっても各演奏者や楽器の個性を存分に楽しむことが出来ます。その分どのパート (楽器) も高度な演奏技術が要求されます。その様な理由で、どの作品も特定の演奏者をイメージして書かれています。音楽が宮廷から出て、多くの聴衆に親しまれるようになったと同時に、大衆化した (イージーな) 音楽に飽き足らない作曲家・演奏家・音楽愛好家がサロンを作り、そこでより高度な芸術的室内楽作品を生み出しました。

フルートは、常に高音域 (ソプラノ) を受け持ち、室内楽でもオーケストラでも重要な主旋律を任せられます。ソリストのような重い責任と、主役ならではの魅力を合わせ持っています。同時に聴衆は、音色・機能性・表現力から主役としてのフルートの台詞 (旋律) を楽しむことが出来ます。研究テーマの「人々はなぜ笛の音に惹かれるのか」の一つの答えを、この室内楽分野で実証できたのではないかと考えています。

今回のプログラムは、広く知られている作品なので、音大生や愛好家にとって作品の価値を再認識して頂けたのではないかと考えています。

(2) フルード 400 年の一人旅 (平成 25 年度相愛大学特別演奏会助成)

《日時》平成 25 年 11 月 21 日（木）

19:00 開演

《会場》ムラマツリサイタルホール新大阪
（約 200 席）

《入場料》一般：3,000 円 学生：1,500 円

《演奏者》フルート：竹林秀憲

《演奏曲目》

1. ファン・エイク：ダフネが最も美しい乙女
だったとき《笛の楽園》より
2. ヨハン・セバスティアン・バッハ：無伴奏
チェロ組曲第 2 番ニ短調（Frank Michael
編）
3. カール・フィリップ・エマヌエル・バッ
ハ：ソナタイ短調
4. フリードリッヒ・クーラウ：カプリッチョ
ニ調
5. ジークフリート・カルク＝エーレルト：ソ
ナタ「アパッショナータ」嬰へ短調
6. 大前哲：空間連鎖 I フルートのための
op.163（日本初演）
7. 松本直祐樹：From Mistic Waves（1 b）for
Solo Flute（委嘱作品 世界初演）

（アンコール）津軽木挽き歌

《入場者》192 名

一般：70 名 学生：58 名 招待：64 名

《研究成果》

約 400 年の時代の流れを、無伴奏フルート作
品のみで表現することを試みました。10 年来
温めてきた企画なので、実現できたことに一定
の達成感を覚えています。体力、精神力共にス

タミナが必要なので、大学業務との関係を如何
にうまく調整するか準備に工夫が必要でした。
年齢からくる体力の衰えをカバーするため、水
泳にも取り組み腹筋力回復に努めました。管楽
器奏者にとって、体力（特に腹筋）維持は必要
不可欠です。今後も引き続き筋力維持に努めな
ければならないと今更ながら感じています。

17 世紀になってフルートは、独奏楽器とし
て脚光を浴びるようになります。ヨーロッパの
宮廷では、チェンバロ、ハーブ、リュート、ピ
オラ・ダ・ガンバと並んでフルートは地位が高
い楽器でした。プロイセンのフリードリッヒ二
世（大王）のフルート好きは大変有名です。現
在の日本でもフルートの人気は高く、全国に愛
好家グループがあり、コンサートも数多く開催
されています。

果たしてフルート一本でどこまで表現できる
のか。ヴァイオリンやチェロと表現力で肩を並
べることが出来るか。その様な挑戦的目標も持
って今回は取り組みました。400 年スター街道
を生き抜いてきた歴史的楽器のフルートを信頼
し、ひたすら作品が物語る言葉を聞き、作曲家
に対する尊敬の念を忘れず、そして多くの温か
い聴衆の助けを借りることによって、無事最後
まで演奏することが出来ました。笛の音は息吹
そのもので、生命の証しであることを少しでも
伝えることが出来たのではないかと自負してい
ます。引き続きフルートの魅力に迫る演奏会を
企画する予定です。

研究成果刊行助成

『ハイブリッド・フィクション
——人種と性のアメリカ文学』
(開文社、2013年)

共通教育センター教授 山下昇

前著『1930年代のフォークナー』（大阪教育図書、1997年）出版以降の15年間に、研究発表やシンポジウム講師などの報告を基にしてさまざまな媒体（学会誌、共著など）に発表してきた論文を中心として一冊の本として纏めたものが本書である。2002年と2008年に2大学で集中講義を行った際のテーマが「人種と性（ジェンダー）で読むアメリカ文学」であり、この延長上に本書は成立している。

第1部男性作家、第2部女性作家の2部構成で、第1部が4章、第2部が6章の全10章から成っている。第1部ではナサニエル・ホーソン、マーク・トウェイン、ウィリアム・フォークナーの3人の白人作家と、ラルフ・エリソンという黒人（アフリカ系アメリカ人）作家の代表的な作品を取り上げ、それらの作品に描きだされた人種の混淆やジェンダー／セクシュアリティの問題と、それらを描出するのに用いられているハイブリッドな技法の意味を分析した。また第2部においては、ジェシー・フォーセット、ネラ・ラーセン、ゾラ・ニール・ハーストン、アン・ベトリ、アリス・ウォーカー、トニ・モリスンの6人の黒人（アフリカ系アメ

リカ人）女性作家の主要作品を論じた。この内の前4者はいわゆる「ハーレム・ルネサンス」期の作家であり、今日のアフリカ系アメリカ人女性文学の隆盛をもたらした草創期の作家だが、本邦においてはあまり研究がなされておらず、本書がパイオニア的な役割を果たしていると自負している。これらの作家たちの作品における人種とジェンダー／セクシュアリティに着目し、それがどのように描きだされているか、いかに時代とともに発展しているのかを追求した。

これらの一連の作業を通して明らかになるのが、アメリカという国が本質的に抱え込んでいる異種混淆性（ハイブリディティ）であり、そのテーマを表現するのに用いられているのが多角的・多声的な技法、すなわちハイブリッドな文学技法である。つまりアメリカ文学が必然的に有する特質が異種混淆性にあり、それが本書を「ハイブリッド・フィクション」と命名した所以である。

本書の出版に際して発表の機会を提供してくれた諸学会の会員諸氏に拙著を謹呈したところ多くの人の好評を得ており、黒人研究会、多民族研究会では書評掲載が予定されている。その他の主要学会誌の書評選考会議は来年度となるので、それらの学会においてどのような評価を受けるかは現在のところ未定であるが、しかるべき評価を受けるものと確信している。最後に本書の出版が可能となったのは一重に本学の研究助成のおかげであり、心より感謝申しあげたい。